

# 『満蒙開拓』に学ぶ ～佐藤副次（木島村村長）の生き方を通して～

城北中学校 宮田

## 1, はじめに

今回のレポートは、満蒙開拓に関わる授業づくりの素材研究として、満蒙開拓による分村移民に反対した佐藤副治村長も含む長野県の5人の村長について、授業で扱えそうな内容だけをピックアップしてみた。授業を構成する上で、飯山以外の村長の素材研究も必要になり含まれているが、ご了承願いたい。参考にして頂ければ幸いである。

## 2, 素材研究の成果

### (1) 分村移民について

世界恐慌に端を発した昭和恐慌によって経済的打撃を受けた農民の救済策として、1932年（昭和7年）に、農林省による「農村経済更生運動」が開始された。他方、疲弊する内地農村を救済するには移民政策によるべきとする加藤完治らと屯田兵移民による満州国維持と対ソ戦兵站地の形成を目指す関東軍により満蒙開拓団が発案され、1932年（昭和7年）に試験的に移民事業が始まった。ただ、財政的な観点から反対論が強かったので、1936年（昭和11年）までの5年間の「試験的移民期」では年平均3,000人の移民を送り出すに過ぎなかった。しかし、同年の二・二六事件により政治のヘゲモニーが政党から軍部に移り、反対論も弱まった。広田弘毅内閣は、満蒙開拓団事業を七大国策事業に位置付けた。同年末には、先に関東軍作成の「満州農業移民百万戸移住計画」をもとに「二十カ年百万戸送出計画」が策定され、拓務省がその実行機関となった。満州移民事業は、本格的移民期に入った。

上述の農林省による「農村経済更生運動」と拓務省による満蒙移民事業とが結合し、「分村移民」政策として結実する。「分村移民」とは、各町村別に、「黒字農家」＝「適正規模農家」を確定し、この「適正規模農家」の平均耕地面積で町村の耕地総面積を割って「適正農家」数を算出し、この戸数を超える農家を「過剰農家」とする。町村ごとに「適正農家」と「過剰農家」とに『分けて』、このうち農村更生のために「適正農家」のみを創出・育成し、他方で「過剰農家」は、日本国内での「更生」は不可能であるがゆえに旧満州・内モンゴル地域に送り出すというものである。これを数式化すると以下となる。

各町村の総農家数－{各町村の耕地総面積÷「適正規模農家」の平均耕地面積}＝「過剰農家」数＝「旧満州・内モンゴルへ送出する農家」数となる。ところで、本分村移民政策の基礎となる上述「適正規模農家」の理論は、土地と農家数（人口）を単純に比較して土地不足状況と「過剰農家」数を把握し、これらを解消する唯一の方法こそ満蒙移民であるという理論である。しかしこの見解は、小作貧農の土地飢餓状況を発生させている根本的要因が、地主的土地所有の現存であるという、当時の日本農村の基本的矛盾と対立の根源を全く無視する議論である。したがって、分村移民政策は、地主的土地所有の温存を大前提にしたうえで土地飢餓状況を解消するには、「過剰農家」を国外植民地へ放出するしか方法を見つけ出せなかったのである。

この分村移民政策の推進により、移民政策を担当する拓務省にとっては、農林省という有力官庁のバックアップを取り付けたことになり、いよいよ移民政策が政府の政策の中心に位置付けられたということになる。と同時に、各県、各郡、各市町村単位における移民の具体的な動員数および動員方法をより具体化・明確化が可能となり、各市町村の官僚組織をフル活用して移民の送出の大量化を図ることができた。まさに地方から中央レベルでの国家総動員の一環としての移民事業の展開が可能となった。

分村移民計画が成立すると、農林省は「経済更生関係道府県事務主務課長主任合同会議」において農村経済更生運動の一環としての分村移民方針を確認した。また同省は「分村補助金交付に関する件」において分村移民に対する補助金交付の細則を定めた。これにより分村運動が農村経済更生運動徹底への必然的な筋道と位置付けられた。これにより、満蒙移民事業は、国策移民として官僚組織や移民関係各機関による募集体制により、より強力に推進されることになった。しかし、この時期は日中戦争を契機とする戦時体制下の労働力不足により潜在的な移民候補者が減少し出した時期と重なる。そのため府県や市町村当局は、国からのノルマを果たすため、個人の自由意思による移民募集というよりも、農村共同体が持つ共同体規制に基づいてなされるという場合が増えるようになり、徴兵や徴用と並ぶ戦時体制下の一種の「動員」としての性格を色濃くもつようになった。

1939年（昭和14年）の第七次長野県大日向村の分村移民は、単一の村で一つの満州開拓団を編成したもので、その後の満州移民政策において分村移民のモデルとなった。同年には、和田伝がこの分村移民をモデルとして小説「大日向」を著し、舞台でも上演されるようになり、当時の「満州熱」をおおいに煽った。

( Wikipediaより )

(2) 満蒙開拓に反対の態度をとった長野県内の5人の村長

村長	主な反対理由
佐々木忠綱 (大下條村村長)	・開拓ではなくて、土地の強制収用であることに疑問。 ・満州での日本人の態度が横暴であること。 ・戦争反対と表だって言うことはできぬが、分村移民をしないことで抵抗をする。
熊谷長三郎 (平岡村村長)	・佐々木との親交も深く、佐々木と同じような思いを持っていたと考えられる。
松本和喜・松本三男 (小川村村長)	・現地視察に行った結果、「実行上の現実的問題により、これを延期することとなりたり」という決断を下している。
佐藤副次 (木島村村長)	・現地視察の結果、「先の見込みが薄い」ということを具体的に報告している。

(3) 佐々木忠綱村長の主張

Q. 自由大学で勉強なさった先を見る目、あるいはものの見方ってものが、佐々木さんが村長やっておられた時にちょうど満州の開拓をさかんに進めておったんだか、今はその時期ではないしやるべきではないってことをおっしゃったということで、大下条村では満州の開拓の分村をしなかったという、そのあたりのお話をおうかがいしたいのですが。

A. 私は昭和13年に、下伊那が、これからは満洲開拓の時代になったで、村長で組織して満州、開拓地を視察するということになりまして、それで私もそれに参加して、昭和13年のたしか5月頃、一か月くらいかかって満州の開拓地を全部視察しました。

その時に第一次弥栄というところを見、それから第二次千振郷という、これはまた非常に進歩的な資本主義的な経営をしておる、当時から見ればとても進歩的ということでありまして。それから第五次だとかいろいろ開拓地をずうっと見て、満州をずうっと一巡して、そして帰ったのでありますが、私が行ってみてちょっと疑問を感じたのが、第二次千振郷なんちゅうのはもう経営がほとんど資本主義的な営利主義な経営でありまして、それから耕地はもう全部立派な既墾地、これどうしても強制収用した土地だと思いました。それで第一次の弥栄というところはやや開墾した痕跡もありました。それからもう一つ、松島自由移民団というのはこの下伊那から松島という人が中心になって自由移民団というのがありましたが、そこへ行ってみましたところ水田は全部朝鮮人が作って、広い水田地帯だったのですが、これも結局買収という形は形だったんでしょうが強制収用でしたなあ、もう見渡す限り。そして、これはどうも開拓ではなくて強制収用ということは、これはちょっと疑問点があるという、疑問を私は持って帰りました。

それから、ハルピンの市街でありましたが車に乗って、我々がいくつにも分かれて車に乗って行きましたところ、幾人ばか乗ったか、10人か15人ばか乗るとる車で行きまして、運転手は日本人でした。そうしたら、向こうから車がきて「止まれ」の号令をかけて止めまして、それで降りてって運転手呼び出して殴って、・・・さかんに怒って、あれ朝鮮人だか満人の運転手だったか、そのこっちに対して態度が悪いちゅうて。まず、日本人はおそろしく横暴だということにも疑問を持って帰ってきた。

(1987年の佐々木忠綱氏へのインタビュー記録より)

(4) 佐藤副治氏の主張

飯山市木島村の村長であった佐藤副次さんは、移民予定地の視察のために満洲に渡った。以下の資料はその後の視察報告(抜粋)である。

(結論)

二十名や三十名の先遣隊の応募では自分としては、満洲には行かない。まず、300名の応募者を整え、その内より選抜して三十名を第一次先遣隊として今年目的地へ送り出し、次の年に第二次先遣隊を送ること。そうでない場合は、自分は満洲へは行かない。

(本論) = 結論を導いた理由

満州移民は絶対に必要であり、日清日露戦争において多くの尊い人命と巨額の資金を費やして手に入れたのが満洲であるので、その地を確保するためには、満洲の地に骨を埋める覚悟が必要である。そのためには、現地のありのままを知り、覚悟をもって移民しなければならない。

国は耕作権利を与えてくれるのではない。今までの話は出たらめである。水田の収穫量は低く、粟が一番収穫が多く金になる。七反ほど耕作して80円の収入があった。馬の飼料として売れるのである。煙草は雹（ひょう）のため栽培できない。粟からの収入が無ければ悲惨であり、副業をしなければ生活できない。

また、家は粗末であり話にならない。永久に住める家はなく、どれも掘立小屋である。寒さは慣れればさほど苦にならぬが、食事は米の飯と白菜の汁と凍ったたくあんであり、これでも上等である。教育も設備が悪く、教員の数も大変少ない。

「これが国策だからやるしかない」という決心が必要であるが、移民は不可能ではない。しかし、苦勞をするために行くつもりでなければならぬ。樂をしようとの見通しでは行けぬ。

(下高井郡満洲開拓史編纂委員会編「満洲開拓史」より)

### 3. まとめ

満蒙開拓に関わる飯山地区の素材は豊富であり、今後も研究を続けて行きたい。今回のレポートでは、教材化にはまだまだ至らぬ段階であるが、お許し頂きたい。